

論文

ダークツーリズムからみる 4・19 義挙と記憶の継承

The April 19 Revolution and the Inheritance of Memory from the Perspective of Dark Tourism

金 世徳*
KIM Saeduk

The document examines the April 19 Revolution in South Korea, a pivotal democratic movement triggered by widespread protests against authoritarian rule and election fraud under the Syngman Rhee administration. The research explores how memorial sites, such as monuments and museums, preserve the collective memory of this event through education and tourism, especially dark tourism. It also highlights reconciliation studies to assess the role of these efforts in addressing historical wounds, fostering civic engagement, and promoting democratic values. Combining historical analysis, site visits, and visitor data, the study seeks to understand how the legacy of this revolution informs present and future societal development.

キーワード：4・19 革命 (April 19 Revolution)、記憶の継承 (Inheritance of Memory)、和解 (Reconciliation)、ダークツーリズム (Dark Tourism)、市民参加 (Civic Engagement)

1. 序論

韓国現代史における重要な転換点として、1960 年の 4・19 義挙¹は特筆すべき出来事である。この義挙は、不正選挙に抗議する市民と学生の運動が全国に広がり、結果として権威主義的な李承晩政権を崩壊に追い込んだ歴史的事件である。李承晩政権は、韓国初の民主的選挙によって成立したにもかかわらず、次第に独裁化し、腐敗と不正が蔓延していた。1950 年代末にはその統治への不満が国民の間で高まり、1960 年 3 月の大統領選挙での大規模な不正が決定的な契機となった。この選挙結果に対する反発は、釜山や大邱をはじめとする地方都市から首都ソウルへと波及し、全国的な抗議運動へと発展した。4・19 義挙は、こうした民衆の力が権威主義に対抗して民主主義を要求する象徴的な事件として記憶されている。

この義挙は、単なる政治的変革の一部として語られるだけではない。多くの犠牲者を伴う悲劇的な記憶でもある点で、その意義は複雑で多面的である。特に、義挙の過程で多くの学生が犠牲となった事実は、韓国社会に深い衝撃を与えた。同時に、この悲劇的な側面が義挙の記憶を継承し共有するプロセスにおいて課題をもたらしている。今日に至るまで、4・19 義挙の記憶は韓国社会における民主主義の象徴であると同時に、過去の痛みを乗り越えるための和解の場としての意義を持つ (Cumings, 1997; 강만길, 2010)。このような二重の性質を持つ記憶の扱いは、歴史的事件の記録と共有における普遍的な課題であり、韓国に限らず多くの社会で見られる現象である。

4・19 義挙を記憶するために設立された記念館や記念碑、犠牲者の墓地といった歴史的現場は、教育や観光の場としても活用されている。これらの施設は、訪問者が義挙の歴史的意義を学び、その背景にある社会的文脈を理解するための貴重な機会を提供している。特に、これらの場所は「ダークツーリズム」の対象として注目されている。ダークツーリズムとは、死や悲劇、暴力の場を訪れる観光活動を指し、歴史的記憶の継承を通じて未来志向の意識を育むことを目的とする (井出, 2021)。この視点から見ると、4・19 義挙の記念施設は単なる歴史の展示空間ではなく、訪問者にとって過去の教訓を学び、社会的記憶を共有する役割を果たす重要な場である。

本研究では、このダークツーリズムの視点を通じて 4・19 義挙を再考し、歴史的記憶の継承と和解学の接点を探ることを目的とする。具体的には、4・19 義挙を象徴する記念碑や記念館がどのように機能しているのかを考察し、記憶が観光や教育を通じて次世代にどのように伝えられているかを分析する。また、これらの記憶が国際社会や次世代に与える意義についても検討する。このようなアプローチを通じて、韓国社会が過去の傷をどのように乗り越え、未来志向の社会形成を目指しているのかを明らかにする。

¹ 4・19 義挙とは、1960 年に韓国で発生した不正選挙に対する市民および学生の抗議運動であり、権威主義的な李承晩政権を崩壊に追い込んだ歴史的事件である。これにより、韓国社会は民主主義への第一歩を踏み出したと評価される。

さらに、本研究は 4・19 義挙の記念施設における歴史的記憶の継承プロセスを明らかにすることで、和解学の新たな視座を提供することを目指す。和解学とは、過去の痛みや対立を克服し、持続可能な平和を実現するための学問分野である。本研究では、4・19 義挙を通じて歴史的記憶が和解のプロセスにどのように寄与するのかを解明する。また、義挙の記憶が国内外でどのように受容されているかを比較し、国際的な視点からもその意義を検討する。

方法論としては、歴史資料を基に義挙の背景と意義を整理することに加え、記念館や記念碑の現地調査を実施する。これにより、記念施設が果たす役割を検証し、それらが教育や観光を通じてどのように記憶を伝えているのかを具体的に分析する。また、訪問者や運営者へのインタビューを通じて、施設の運営方針や記憶継承の実態を探る。これらのアプローチを総合的に組み合わせることで、4・19 義挙の記憶が韓国社会に与える影響を多角的に明らかにする。

本研究を通じて、4・19 義挙の記憶がいかにして社会的、文化的、政治的な意味を持つかを探るとともに、過去と現在を結びつける和解学の視座を提示することを目指す。この視座は、韓国のみならず、歴史的悲劇を抱える他の社会にも適用可能な普遍的な枠組みとしての可能性を秘めている。

2. 4・19 義挙の歴史的背景

（1）李承晩政権と市民の不満

1948 年に成立した大韓民国初代政府の指導者として、李承晩は反共主義を掲げ、冷戦下の国際社会において「自由主義陣営の最前線」としての韓国の立場を築いた。しかし、その統治手法は権威主義的であり、国家保安法を用いた政治的弾圧や、選挙不正を通じた長期政権維持が目立った。彼の政治姿勢は、初期には共産主義の脅威に対抗するために一定の支持を得たものの、次第に市民の不満を招く要因となっていった。

特に、経済政策の失敗と不平等が市民の間で深刻な不満を引き起こした。朝鮮戦争（1950-1953 年）³後、国際社会の支援を受けて復興が進められたが、その成果は特定の階層に集中し、農村部と都市部の格差が拡大した。さらに、都市労働者階級の低賃金労働や、インフレーションによる生活コストの上昇が、庶民の生活を一層困難なものとした。

政治的にも、李承晩政権の腐敗が市民の間で批判的となった。1950 年代後半には、李承晩が自らの政権を維持するために憲法を改正し、再選可能な仕組みを整えた。このプロセスにおいて、国会議員に対する賄賂工作や反対勢力への圧力が行われ、政治への不信感が広がった。また、選挙不正は日常的に行われ、特に 1960 年の大統領選挙では露骨な不正行為が市民の怒りを買った。

選挙の不正は、都市部の知識人や労働者階級だけでなく、学生層にも深刻な影響を与えた。学生たちは、自らの未来が李承晩政権のもとで損なわれていると感じ、政治に対する関心と行動を強めた。このような市民全体の不満が、4・19 義挙という爆発的な抗議運動の背景を形成したのである。

李承晩政権に対する市民の不満の背景には、政治的要因と経済的要因の双方が存在していた。まず、政治的には李承晩政権の腐敗と不正が市民の批判を集めた。1950 年代後半、李承晩は自らの政権を維持するために憲法を改正し、再選を可能にする仕組みを整えた。この過程において、国会議員への賄賂工作や反対勢力に対する圧力が横行し、政治への信頼が著しく損なわれた。特に、1960 年の大統領選挙における露骨な選挙不正は市民の怒りを頂点に達させた。このような状況は都市部の知識人や労働者階級に限らず、学生層にも深刻な影響を及ぼした。学生たちは、自らの未来が李承晩政権の下で損なわれていると感じ、政治への関心を強めるとともに行動を活発化させた。

経済的には、李承晩政権の政策失敗が市民の不満を一層増幅させた。朝鮮戦争（1950-1953 年）後、国際社会の支援を受けた復興政策が進められたものの、その恩恵は特定の階層に集中し、農村部と都市部の経済格差が拡大した。農村部では、農業改革が不十分

² 李承晩（1875-1965）は、大韓民国初代大統領（1948-1960）として反共主義を掲げ、国家建設に尽力した一方、権威主義的な統治と不正が批判された。特に四月革命により辞任に追い込まれ、その評価は分かれている。

³ 朝鮮戦争（1950-1953 年）は、朝鮮半島の南北間で発生した武力紛争であり、北側はソ連および中国、南側はアメリカを中心とする国連軍の支援を受けて戦った。1950 年 6 月 25 日に北朝鮮の侵攻により開戦し、38 度線を挟んでの攻防が続いた。戦争は 1953 年 7 月 27 日の休戦協定により停戦したが、正式な平和条約は締結されておらず、現在も軍事的緊張が続いている。本戦争は冷戦構造の象徴とされ、多大な人的・物的被害をもたらした。

であったため多くの農民が貧困に苦しみ、都市部では労働者階級が低賃金労働を強いられる状況が続いた。加えて、インフレーションによる生活費の高騰が庶民の生活を一層困難にした。これらの経済的不平等は、李承晩政権に対する市民の不満の主要な要因となり、特に都市の労働者層や中間層を中心に不満が広がった。

さらに、李承晩政権は国家保安法を利用して共産主義勢力だけでなく、政権批判者や反対勢力を抑圧する政策を推進した。このような政策は、政権の安定維持を目的としていたが、市民の言論の自由や集会の自由を著しく制限する結果を招いた。そのため、自由を求める市民や知識人の間で政府に対する不満が急速に高まった。特に、学生たちは抑圧的な政治環境に直面し、李承晩政権の統治に対して反発を強めた。

このような市民の不満がピークに達したのが、1960 年に発生した 4・19 義挙である。この抗議運動は、李承晩政権による不正選挙への抗議を契機として勃発したが、その背景には長年の政治的腐敗や経済的不平等、そして市民の自由の制限に対する怒りが存在していた。4・19 義挙は、都市部を中心に学生を含む幅広い市民層が参加する大規模な運動へと発展し、最終的に李承晩が大統領職を辞任する契機となった。この事件は、韓国における民主化運動の重要な転換点として位置づけられる。

以上のように、李承晩政権に対する市民の不満は、政治的腐敗や選挙不正、経済的不平等、抑圧的な統治体制といった多面的な要因によって構築された。これらの不満は、初期には分散していたが、1960 年の選挙不正を契機に統合され、最終的に 4・19 義挙という形で爆発的な抗議行動として現れた。このような李承晩政権と市民の関係は、韓国現代史における権威主義的政治体制と民主化への転換を理解する上で重要な視点を提供するものである。



写真 1 4・19 革命記念館内の李承晩ポスター・左（筆者撮影）

（2）大学生運動とデモの展開

4・19 義挙は、学生運動の活発化とその社会的波及の中で展開された。この事件は、韓国の民主主義運動の歴史において重要な分岐点であり、特に大学生たちが果たした役割は極めて大きい。大学生たちは、政治的不正に対する批判の先頭に立ち、李承晩政権に直接的な反対行動を取る中心的な存在であった。彼らは、政府の腐敗、不正選挙、そして警察の暴力に対して組織的な抗議活動を展開し、韓国社会全体に大きな影響を与えた。

デモの発端は、1960 年 3 月 15 日に行われた大統領選挙であった。この選挙では、当時 84 歳で 4 期目の大統領職を目指していた李承晩が、露骨な不正行為を通じて権力を維持しようとした。投票所での暴力、票の改ざん、不正投票が各地で報告され、市民や学生の間で強い反発が広がった。選挙の結果、李承晩が圧倒的な勝利を収めたとされるが、その過程には多くの不透明な手法が用いられたため、民衆の怒りを一層煽る結果となった。

特に、選挙後に馬山市で発生した金朱烈（キム・ジュヨル）の死亡事件⁴は、全国的な抗議運動の引き金となった。金朱烈は選挙に反対するデモに参加して行方不明となった後、遺体で発見された。彼の遺体は湾内で引き上げられ、顔には酷い打撲痕が残されていた。検視結果により、警察による暴力が原因と推定され、これが市民や学生たちの怒りを一層激化させた。この事件は瞬く間に全国に知れ渡り、抗議運動の象徴的な出来事となった。

抗議活動は全国各地に広がり、4 月 18 日には高麗大学の学生たちがソウル市内で平和的なデモ行進を行った。このデモは、選挙不正と政府の腐敗を非難し、民主主義の回復を訴えるものであった。学生たちは「自由」と「正義」をスローガンに掲げ、統制され

⁴ 金朱烈（キム・ジュヨル）の死亡事件は、1960 年 3 月 15 日に実施された大韓民国の不正選挙に対する抗議運動の過程で発生した。彼は慶尚南道馬山市で行方不明となり、同年 4 月 11 日に港で遺体となって発見された。解剖結果から警察の暴力による死亡が明らかになり、国民の強い怒りを引き起こした。この事件は四月革命の引き金となり、李承晩政権崩壊の決定的契機となった。

た秩序ある行動でデモを展開した。しかし、このデモに対する政府側の対応は冷酷だった。翌日、親政府勢力や警察による暴力的な弾圧が加えられ、多くの学生が負傷した。この暴力に対する怒りは全国の大学生や市民たちに広まり、抗議運動は一層過激化していった。

そして、4 月 19 日には全国規模のデモが発生した。ソウル市内では数万人に及ぶ市民と学生が集結し、李承晩政権の退陣を要求する大規模なデモが行われた。デモ参加者たちは「自由」と「民主主義」をスローガンに掲げ、行進しながら政権の腐敗や不正選挙への抗議を訴えた。特に若い世代の学生たちは、未来を守るために自らが犠牲になる覚悟で運動に参加し、民主主義への熱意を示した。これに対し、李承晩政権は事態の収拾を図るため軍隊を動員し、デモを武力で鎮圧しようとした。

軍隊が出動したことで、抗議活動は流血の惨事となった。デモ隊に向けて実弾が発砲され、多数の死傷者が発生した。この強硬措置は国際社会からも非難を浴び、李承晩政権の正当性は一層揺らいだ。市民の間では、政府が自国民に対して暴力を行使することへの怒りと悲しみが広がり、抗議の声はさらに強まった。最終的に、国内外からの圧力を受けた李承晩は辞任に追い込まれ、4・19 義挙は独裁的な政権に終止符を打つ結果となった。

この義挙の特徴として、大学生たちの行動が社会全体に及ぼした影響が挙げられる。彼らは情報を共有し、計画的にデモを組織することで、政府への直接的な挑戦を行った。また、学生運動に触発された市民たちも次第に抗議活動に参加し、広範な社会的連帯を形成した。この連帯が最終的に李承晩政権を崩壊させる原動力となったと言える。

4・19 義挙は単なる反政府デモに留まらず、韓国の民主主義発展における転換点として位置づけられる。この事件を通じて、若者たちが政治的変革において重要な役割を果たす可能性が示され、以後の民主化運動においても大きな影響を与えた。特に大学生たちの勇気ある行動は、韓国の民主主義の未来を切り開く力となり、現在でもその精神は多くの人々に受け継がれている。



写真 2 4・19 記念館内のデモ隊ポスター（筆者撮影）

（3）義挙の結果と影響：民主化の第一歩

4・19 義挙の直接的な成果として、李承晩は 4 月 26 日に大統領職を辞任し、第一共和国は崩壊した。この出来事は、韓国における権威主義的な統治への終止符を打つ重要な転換点となり、民主主義への第一歩として位置づけられる。義挙後には第二共和国が成立し、韓国は新たな政治体制への移行を試みた。

第二共和国の成立により、一時的に民主主義的な統治が進められたが、政治的不安定が続いた。特に、軍部が政治に介入する動きが強まり、1961 年には朴正熙によるクーデター⁶が発生し、軍事政権が樹立された。それでも、4・19 義挙は市民社会の覚醒と政治参加意識の高まりを象徴する出来事として、その後の民主化運動において重要な意義を持つこととなった。

また、義挙は韓国社会における市民運動の基盤を形成した。学生運動は、後の 1970 年代・1980 年代の民主化運動において主導

⁵ 韓国の第一共和国（1948-1960 年）は、大韓民国建国と同時に発足した政権であり、李承晩が初代大統領を務めた。反共主義を基盤に国家建設を進め、朝鮮戦争を経験しながらも、経済復興と国際的地位の確立を目指した。しかし、権威主義的な統治や選挙不正、腐敗が深刻化し、四月革命による市民運動の結果、崩壊した。第一共和国は韓国の民主化運動の出発点として重要な歴史的な位置を占めている。（ソ・ジュンソク（2008）、韓国現代史 60 年、p. 68-73）

⁶ 1961 年 5 月 16 日、朴正熙少将を中心とする一部の軍部勢力が、当時の政治的混乱と経済的停滞を理由にクーデターを起こした。この「5・16 軍事クーデター」により、第二共和国の文民政権はわずか 1 年で崩壊し、軍事政権が成立した。朴正熙はその後、国家再建最高会議を設立し、経済開発や国防強化を掲げつつ、強権的な統治を開始した。彼の統治は、韓国の急速な経済成長を実現する一方で、民主主義の抑圧と人権侵害を伴うものだった。クーデターは韓国現代史において、権威主義の新たな時代を切り開く重要な転換点となった。

的な役割を果たし、4・19 義挙の精神を継承する形で発展した。このように、義挙は韓国の民主主義の歴史において重要な里程標として評価されている。

国際的にも、4・19 義挙は注目を集めた⁷。市民と学生が権威主義的な政権に対して一致団結し、平和的な手段で政治的変革を実現したことは、他国の民主化運動にとっても重要な教訓となった。特に、義挙が示した市民の力の可能性は、世界的な民主主義の発展における一例として評価されている。

さらに、義挙の記憶は、韓国社会における歴史的な教訓として継承されている。義挙の犠牲者を追悼するための記念碑や記念館が設置され、これらの施設は現在、教育的な役割を果たしている。特に若い世代が義挙の意義を学び、民主主義の価値を理解する場として機能している点は注目に値する。

以上が 4・19 義挙の背景、展開、そしてその結果と影響である。この義挙は、単なる歴史的事件ではなく、韓国社会の現在と未来を考える上で重要な意義を持つ。民主化の第一歩としての位置づけを超えて、その記憶をいかに次世代に継承し、平和で持続可能な社会形成に活かすかが、今後の課題として残されている。

3. 4・19 義挙とダークツーリズム

(1) 義挙記念館、記念碑、現場の意義

4・19 義挙の記憶を後世に伝えるために設置された記念館や記念碑、犠牲者の墓地などの現場は、韓国現代史における重要な学習の場であると同時に、観光資源としても注目を集めている。本稿では、これらの施設が果たす歴史のおよび教育的役割に加え、観光地としての経済的意義についても考察する。

まず、ソウル市内に所在する 4・19 義挙記念館は、義挙の歴史的意義を伝える重要な施設として位置づけられる。同記念館では、1960 年当時の写真や遺品、犠牲者の記録が展示されており、義挙が韓国の民主主義運動において果たした役割やその背景が詳細に紹介されている。これらの展示物は、訪問者に当時の市民が民主化を目指して直面した困難や犠牲を深く理解させる機会を提供している。また、同記念館ではデジタル技術を活用した展示やインタラクティブな体験プログラムが導入されており、特に若年層に対する教育的効果を高めている。これにより、訪問者は単なる観覧者としてではなく、歴史的事実の受け手として能動的に関与することが可能となる。

一方、4・19 国立墓地は、義挙の犠牲者を追悼するための特別な場所として設置されている。同墓地では毎年 4 月 19 日に追悼式典が開催され、犠牲者の霊を慰めるとともに、民主主義の重要性を再確認する場として機能している。特に追悼式典は、犠牲者の遺族や政治家、市民が一堂に会し、過去の教訓を共有し未来への展望を語り合う場としての意義を有している。このように、国立墓地は単なる追悼の場を超え、韓国社会における市民参加の象徴として位置づけられている。

さらに、これらの施設は地域経済の活性化にも寄与している点が注目に値する。義挙記念館や国立墓地は観光資源としての価値を有しており、地域住民が運営する土産物店や飲食店の経済活動を促進している。特に市民参加型観光の視点から見ると、これらの施設は地域社会との連携を強化し、観光客と地域住民が歴史を通じてつながる場を提供している。これにより、記念施設は教育的価値と観光的価値の両立を実現するモデルケースとなっている。

また、これらの施設は現代の社会問題や課題に取り組む際の指針を提供する場としても機能している。民主主義が直面する課題や市民参加の重要性について考察するきっかけを与え、訪問者が自らの行動を見直す契機を提供している。このように、記念施設は過去と現在をつなぐ橋渡し役を果たし、社会全体の成熟を促進する役割を果たしている。

⁷ 4・19 義挙は、冷戦期における民主化運動の象徴として国際的に注目を集めた。特に、西側諸国のメディアは、学生や市民の抗議運動が権威主義的な李承晩政権を打倒した事実を民主主義の勝利として報道した。また、この義挙は他のアジア諸国の民主化運動に影響を与え、市民による政治的変革の可能性を示すモデルと見なされた。韓国の同盟国であるアメリカもこの出来事を契機に韓国の民主化を注視し、支援政策を再検討する動きを見せた。さらに、義挙後の政治的動向は国連など国際機関でも言及され、韓国の民主主義への移行が国際社会で評価された。こうした点から、4・19 義挙は国内のみならず、国際的な民主主義運動においても重要な転換点であったといえる。

⁸ 韓国の 4・19 国立墓地は、1960 年の四月革命で犠牲となった市民や学生を追悼するために設立された国家墓地である。首都ソウルの北部に位置し、民主化の象徴として保存・管理されている。墓地には犠牲者の墓碑や記念碑が整備され、歴史教育や市民の追悼の場として機能している。この施設は、韓国における民主主義の成長過程と市民運動の意義を象徴する場所である。

結論として、4・19 義挙記念館や国立墓地などの記念施設は、韓国の民主主義の歴史を理解し、その価値を再確認するための重要な場である。これらの施設は教育的価値だけでなく、観光地としての経済的意義や市民参加の象徴としての役割も有している。したがって、これらの施設を通じて歴史を学び、感じ、議論することは、韓国社会が未来に向けてどのように歩むべきかを考える上で極めて意義深いといえる。



写真3 4・19 国立墓地（筆者撮影）

（2）ダークツーリズム理論との関連

ダークツーリズムは、死や悲劇、暴力に関連する場所を訪れる観光活動を指し、観光者が過去の教訓を学び、歴史的記憶を共有することを目的としている。この理論の枠組みは、4・19 義挙の記念施設や現場にも適用される。義挙の記憶は、観光を通じて国内外の訪問者に共有されることで、単なる過去の出来事ではなく、現代に生きる教訓としての意義を強調されている。

1) 歴史的現場が観光資源化されるプロセス

4・19 義挙の歴史的現場が観光資源化されるプロセス⁹には、複数の要素が関与している。このプロセスは、歴史の記憶を保存し、問題意識を提起するためのプランとして機能しており、これには国家的記念事業や政府、自治体、社会的要因などが影響を与えている。以下に、このプロセスの主要な要素について詳細に述べる。

一つ目の要素は、国家的記念事業の一環として、4・19 義挙の記念館や墓地が設置されることである。このような記念事業は、義挙における犠牲者の記憶を物理的な形で保存することを目的としている。そこでは、犠牲者の名前や事件の詳細が明記された碑文、デモの写真、記録映像などが用いられている。これらは観光客に実象的な情報を提供し、それを通じて義挙の意義を深く理解させる機能を持っている。この事業を続けてきたことにより、義挙の記憶は記念的な価値を磨りあげ、観光地としての所度を確立させた。

政府や自治体による観光提促政策も、義挙の現場を観光資源化する上で重要な役割を果たしている。記念館や墓地は地元観光の一部として位置づけられ、パンフレットやオンライン情報を通じて広く宣伝されている。これは地元の経済活性化にも貢献しており、実用的な意義を持つ。また、このような現場は学校の社会科見学の場として利用されることが多い。学生たちは、ここを訪れる中で義挙の歴史を学び、自分の社会に対する責任意識を育む機会を得る。これは単なる観光以上の教育的価値を持たらしめている。

義挙の現場が観光資源化される背景には、受容者がそこに単なる観光以上の意義を見出すことがある。例えば、4・19 義挙記念館では、受容者に歴史の悲劇を知らせ、それを自身の人生や社会的責任に縛り付けるよう促す展示が行われている。この種の展示は、

⁹ 4・19 義挙の歴史的現場が観光資源化されるプロセスは、歴史的意義の明確化と記念施設の設立に始まり、展示物や記念碑による記憶の視覚化を経て進展する。記念館や墓地は、教育的価値を持つだけでなく、ダークツーリズムの対象地として国内外の観光客を引き付けている。学校教育や記念行事、特別展などを通じ、訪問者が歴史的出来事に対する共感を深める機会を提供している点も特徴的である。さらに、地域の観光資源として経済的利益を生むと同時に、記憶の商業化を避けるための持続可能な管理が重要視されている。このようなプロセスにより、4・19 義挙の現場は、教育と観光が融合した歴史記憶の共有空間として機能している。

受容者の情感や思考に影響を与え、問題意識を提起させる。そこでは、観光は単なる娯楽としてではなく、学びと体験の場として機能している。

これらの要素が組み合わさることで、4・19 義挙の現場は単に歴史を記憶する場所に留まらず、社会的、教育的価値を持つ地域として存在している。その結果、これらの現場を訪れることは、問題意識を高め、社会の謙虚と和解を提供する機会を作り出す。このような観光の実践は、社会を再思考させる可能性を持つと同時に、観光の新たな視点を提供している。

2) 記憶が観光客に共有されるプロセス

4・19 義挙の記憶は、観光を通じて訪問者にさまざまな形で共有されており、このプロセスは視覚的体験、ストーリーテリング、そして訪問者自身の感情的な反応という複数の要素によって成り立っている。これらの要素は、単に歴史的事実を伝えるだけではなく、訪問者が過去の出来事を深く理解し、共感する機会を提供している点で重要である。特に視覚的体験は、記念館や記念碑といった物理的な場の展示物を通じて実現されており、これらは記憶の共有と伝達において中心的な役割を果たしている。

視覚的体験の具体例として、記念館や記念碑内の展示物が挙げられる。例えば、4・19 革命記念館では、義挙当時のデモの写真や犠牲者の遺品が展示されている。これらの展示物は、訪問者に義挙の歴史的背景や具体的な状況を視覚的に理解させる手助けをする。また、展示物には警察による発砲の映像や当時の新聞記事、さらには犠牲者の家族の証言を映像化したものも含まれており、訪問者が事件の詳細をリアルに体感できるよう工夫されている。このような視覚的体験は、単に事件の事実を学ぶだけでなく、その背景にある社会的・政治的な文脈や、義挙がもたらした影響を考える契機を提供している。

さらに、これらの展示物は訪問者に感情的な影響を与える点でも重要である。特に、犠牲者の遺品や家族の証言は、訪問者に義挙が単なる歴史上の出来事ではなく、個々の人々の人生に深い影響を及ぼしたものであることを実感させる。例えば、学生が使用していた筆記用具や衣服、あるいはその家族が残した手紙などは、訪問者の心に強い印象を残す。これらの展示物を通じて、訪問者は義挙の持つ感情的な重みを直接感じ取り、歴史的な出来事をより個人的かつ具体的な視点から理解することが可能となる。

こうした視覚的体験の効果は、単なる感傷的な反応を超えて、訪問者に歴史的事実の学びを深めさせる役割を果たしている。すなわち、展示物を通じた視覚的体験は、過去の出来事が現代社会においてどのような教訓を与えるのかを考えるきっかけを与える。例えば、義挙の記憶を学ぶ訪問者は、民主主義の発展や権力への市民の抵抗という普遍的なテーマについて深く考察する機会を得る。これにより、4・19 義挙の記憶は単なる過去の出来事の共有にとどまらず、現代における市民意識の啓発や社会的な価値観の形成にも寄与しているといえる。

さらに、ストーリーテリングも重要である。記念館では、ガイドによる解説や音声ガイドが提供されており、訪問者が義挙の背景やその後の影響について深く理解できるよう工夫されている。これにより、義挙の記憶は単なる歴史の一部ではなく、現在と未来をつなぐ「物語」として共有されている¹⁰。

観光客の感情的な反応は、記憶の共有において重要な要素の一つである。特に義挙の現場を訪れることで、多くの観光客は深い悲しみや怒り、そして敬意を感じる人が多い。こうした感情的な体験は、単なる知識として過去を理解するのではなく、それを自らの体験として内面化する契機となりうる。この過程を通じて、訪問者は過去の出来事の教訓を個人的かつ社会的な次元で再解釈し、それを日常の行動や態度に反映させる可能性が高まる。さらに、感情を伴う記憶の共有は、単なる歴史認識を超えて、他者への共感や社会的責任感を喚起し、訪問者同士や地域社会との連帯意識を育む役割も果たす。このような感情的な体験は、単なる歴史的事実の共有を超え、個々人が持続的に過去を想起し、未来に向けて行動するための動機付けとなり得る。そのため、観光地としての義挙の現場が果たす役割は単に歴史的記録の保存にとどまらず、訪問者の内面的変容や社会的影響に関わる重要な意味を持つといえる。このような観点から、観光客の感情的反応を誘発する工夫が、記憶の共有をより効果的にし、社会的な意識変革を促進する鍵となる。

¹⁰ この義挙は、韓国の民主主義の基盤を形成した市民と学生の力の象徴であり、その記憶は現代社会における市民参加や正義の追求といった価値観を伝えている。学校教育や記念行事を通じて若い世代に引き継がれることで、市民意識の向上や民主主義の継承に寄与している。また、記念館や記念碑は、単なる歴史保存施設を超え、和解と共感の場として機能し、社会的対話を促進する役割を果たしている。さらに、この記憶は国際的な民主化運動の文脈でも再認識され、韓国の民主主義運動の意義が世界的に評価されている。4・19 義挙の物語は、文化的表現や観光活動を通じて継続的に再構築され、過去と現在を結びつけるとともに、未来志向の社会形成を可能にする重要な要素となっている。



写真4 4・19 革命犠牲者の写真（筆者撮影）

（3）ダークツーリズムとしての意義と課題

4・19 義挙記念館や記念碑は、ダークツーリズムの対象として、過去の悲劇を通じて未来を考える場を提供している。これにより、歴史的記憶が単なる過去の記録にとどまらず、訪問者自身が民主主義や市民社会の意義を再確認する機会となる。

一方で、記憶の商業化や観光化のリスクも指摘されており、これらの施設が本来の教育的・社会的役割を失う危険性がある。こうした課題に対応するためには、観光と教育のバランスを保つことが重要である。

たとえば、記念館では単なる観光地としてのプロモーションではなく、歴史の学びを重視したプログラムを展開する必要がある。また、訪問者が義挙の記憶を他者と共有し、その教訓を社会的に活かす仕組みを整えることも求められる。

以上が、4・19 義挙とダークツーリズムの関係に関する詳細な考察である。義挙の記憶をいかに次世代に引き継ぎ、社会的教訓として活かすかは、今後も重要な課題であり続けるだろう。



写真5 4・19 革命位牌安置所（筆者撮影）

4. 和解学の視点から見る 4・19 義挙

（1）過去の傷をどう乗り越えるか

4・19 義挙は、韓国現代史において民主主義の象徴であると同時に、多くの犠牲者を伴った悲劇としても記憶されている。義挙の中で発生した流血事件や警察・軍隊による市民弾圧は、国家と市民との間に深い傷を残した。この過去の傷をどのように乗り越え、未来志向の社会を構築するかは、韓国社会にとって大きな課題である。

和解学¹¹の視点では、過去の傷を乗り越えるために、まずその傷を直視し、真実を明らかにするプロセスが不可欠である。4・19 義挙の場合、記念館や記念碑がその役割を果たしている。これらの施設では、犠牲者の名前やデモの経緯、李承晩政権の腐敗が展示されており、訪問者が当時の状況を理解する手助けをしている。特に、写真や遺品といった視覚的資料は、歴史を生々しい形で伝

¹¹ 和解学の試み（2021）によると、和解学とは歴史的、文化的、社会的な対立や葛藤の解決を目指し、和解の理論と実践を体系的に研究する学問領域である。過去の加害と被害の構造を分析し、当事者間の対話、記憶の共有、責任の認識を通じて関係修復を図ることを目的とする。心理学、社会学、国際関係学など多分野と連携し、具体的な和解プロセスのモデル化や政策提言を行う。特に、戦争、植民地支配、人権侵害などの歴史的課題が焦点となり、持続可能な平和構築への寄与が期待される。

え、訪問者に義挙の悲劇的側面を共有させる。

一方で、過去を克服するためには、単なる事実の共有にとどまらず、犠牲者や遺族への公式な謝罪や補償が重要である。4・19 義挙に関連しては、犠牲者を追悼するための国家的な式典や記念日が制定され、遺族への一定の補償が行われてきた。しかし、これらの措置は過去の苦しみを完全に癒すものではなく、より深いレベルでの社会的な対話と相互理解が求められている。

和解学の視点からは、記憶を共有することが和解への第一歩である。4・19 義挙を記憶する活動が、韓国社会における歴史的傷を癒やすのに一助となる一方で、こうした活動を継続することで、過去の教訓を未来へとつなげる意義が強調される。



写真6 4月学生革命記念塔（筆者撮影）

（2）市民と国家の和解プロセス

4・19 義挙は、市民と国家との間に深刻な対立を引き起こした事件であり、その和解プロセスは、韓国における民主主義の定着にとって不可欠な要素となった。李承晩政権は義挙を引き起こした当事者として、市民に対する不正や弾圧を行った一方で、その崩壊後に成立した第二共和国¹²は、義挙を韓国の民主主義の基盤として位置づけ、国家と市民の間の対話を試みた。

国家と市民の和解プロセスにおいて重要なのは、正義の回復と信頼の再構築である。義挙後の第二共和国では、李承晩政権下で行われた不正や弾圧に対する批判が行われるとともに、犠牲者の名誉回復が進められた。このような措置は、市民が国家に対する信頼を取り戻すための第一歩となった。

また、和解プロセスには市民社会の役割も重要である。義挙の記憶を継承するために、市民団体や学生団体が活発に活動を展開し、記念行事の開催や義挙に関する教育プログラムの開発が進められた。これらの活動は、国家主導だけではなく、草の根の市民運動による和解の推進を象徴している。

和解学の視点では、国家と市民の和解は一度限りの行為ではなく、継続的なプロセスであるとされる。4・19 義挙の場合、国家と市民が共に義挙を記憶し、その教訓を次世代に引き継ぐことで、過去の対立を乗り越えるだけでなく、新たな社会的合意を形成する基盤となっている。

（3）現在の韓国民主主義における義挙の位置づけ

現在の韓国において、4・19 義挙は単なる歴史的事件ではなく、民主主義の象徴として広く認識されている。この義挙は、権威主義的な体制¹³に抗する市民の力を示した出来事であり、その意義は現代の韓国民主主義の中核に位置づけられている。

特に、義挙の記憶は、市民社会における政治参加の重要性を強調する役割を果たしている。義挙を通じて、市民と学生が一致団結

¹² 韓国の第二共和国（1960–1961 年）は、四月革命による李承晩政権の崩壊を受けて成立した民主主義政権である。議院内閣制を採用し、権威主義的統治からの脱却を図ったが、経済的不安定や社会的混乱が続いた。さらに、革新勢力と保守勢力の対立が激化し、政権運営は困難を極めた。1961 年 5 月 16 日の軍事クーデターにより崩壊し、その期間は短命であったものの、韓国の民主化過程における重要な歴史的転換点となった。

¹³ 韓国における権威主義的な体制は、国家の安定や経済発展を名目に、中央集権的な権力運営と抑圧的な手法を特徴とする政治体制を指す。この体制は、1948 年の建国以降の第一共和国における李承晩政権や、その後の軍事政権（朴正熙、全斗煥政権）によって強化された。選挙不正や言論統制、反対勢力の弾圧といった抑圧的手段が用いられる一方、経済開発や国家安全保障の名の下で政策が実行された。この体制は、政治的自由や民主主義の制約を意味する一方、急速な経済成長や社会的秩序の維持という成果も伴った。1987 年の民主化運動により権威主義体制は終焉を迎えたが、その影響は現代の政治文化や社会構造においても見られる。

し、平和的手段で政権を変革した経験は、現代の民主主義における市民運動の基盤を形成している。この精神は、1970 年代から 1980 年代にかけての民主化運動に継承され、1990 年代の完全な民主化に至る過程で重要な影響を与えた。

また、4・19 義挙は、韓国教育システムの中でも特別な位置を占めている。義挙に関する内容は、歴史教科書に詳細に記載され、学生たちはこの事件を通じて民主主義の価値や市民参加の意義を学んでいる。さらに、4 月 19 日を記念する式典や行事は、全国的な規模で行われており、義挙の精神を次世代に引き継ぐ役割を果たしている。

一方で、4・19 義挙の記憶をどのように現代社会に活かすかという課題も残されている。民主主義の危機¹⁴や社会的分断¹⁵が再び浮上する中で、義挙の精神を再確認し、それを現代の課題解決に活かすことが求められている。和解学の視点では、過去の教訓を未来志向の社会形成に活用することが重要であり、4・19 義挙の記憶がこのプロセスを推進する役割を果たすと期待されている。

5. 国立 4・19 民主墓地現地調査とアンケート調査

国立 4・19 民主墓地パンフレット（2021）によると、韓国民主主義の象徴として設立された重要な歴史的施設である。その設立は、1961 年 2 月、当時の国務会議において公園墓地の設立が決議されたことから始まった。翌 1962 年に起工式が行われ、1963 年には「国立 4・19 墓地」の名称で竣工式および記念塔の除幕式が執り行われた。この墓地は 4・19 革命で命を落とした人々を追悼し、その意義を後世に伝える場として機能している。

1993 年からは聖域化事業が開始され、2006 年には「国立 4・19 民主墓地」という現在の名称に改称された。敷地面積は総計 96,837 m²に及び、そのうち 29,405 m²が聖域空間として整備されている。この区域には墓域のほか、遺影奉安所や記念館が設置されている。墓地の収容能力は 547 基であり、2012 年時点で 315 基が埋葬されている。第 1 墓域および第 2 墓域には、4・19 革命で命を落とした犠牲者と負傷者 277 名が埋葬されており、第 3 墓域には革命功労者として建国褒章を受けた 38 名が安置されている。一方、第 4 墓域は将来のための予備墓域として確保されている。

さらに、国立 4・19 民主墓地には、4・19 革命に関連する記念館が併設されている。この記念館は三層構造で、1 階では革命の背景や内容を、映像メディアを通じて展示している。2 階には情報検索コーナーや遺物展示エリアが設けられており、3 階は展望台として使用されている。また、敷地内には「4 月学生革命記念塔」や「守護礼賛の碑」、「守護者像」、「群像レリーフ」、「正義の炎」といった記念彫刻が点在しており、訪問者に革命の精神を体験させる工夫が施されている。

本施設は、韓国の民主主義の象徴として重要な役割を果たすだけでなく、教育的な意義も有している。展示物や記念彫刻を通じて、訪問者に 4・19 革命の意義を視覚的かつ体験的に伝え、民主主義の価値を次世代に引き継ぐ役割を果たしている。今後も、こうした記念施設を活用した歴史教育や観光資源としての発展が期待される。

なお、質的分析として、2022 年に見地で行った観光客やガイドの証言を通じて、記念館の影響や意義を明らかにする。以下に、インタビュー結果を示す。

まず、観光客の声で、高校生（18 歳）へのインタビュー調査では、「学校の社会科見学で訪問しました。当時の写真や遺品を見て、義挙が私たちの日常生活と関係していることを実感しました。特に、犠牲者の名前が刻まれた記念碑が印象的でした。」という。

また、一般観光客（40 代会社員）のインタビュー調査によると、「歴史を学ぶだけでなく、民主主義の価値を再確認する機会になりました。デモに参加した若者たちの勇気に感動しました。」と答えた。

また、ガイドのインタビュー調査では、記念館スタッフ（50 代）からは「多くの学生が来館し、展示物を通じて義挙の歴史と意義を学んでいます。特に、犠牲者の物語に感情移入する若者が多いです。」と、外国人向けツアーガイド（30 代）からは、「外国人

¹⁴ 韓国における 4・19 以後の民主主義の危機は、第二共和国期（1960–1961 年）における政治的不安定と、1961 年 5 月 16 日の軍事クーデターを指す。この時期、李承晩政権崩壊後の民主化の動きとして議院内閣制が導入されたが、革新勢力と保守勢力の対立や経済的混乱により政治の機能不全が顕在化した。こうした状況を背景に、朴正熙らによる軍事クーデターが発生し、短命に終わった第二共和国は権威主義的体制へと回帰した。この過程は、民主主義の発展を阻害し、韓国政治が長期にわたり軍事主導の権威主義的枠組みで再編された歴史的転換点となった。

¹⁵ 韓国における社会的分断は、4・19 以後の第二共和国期に顕在化した政治的対立や経済的不平等を背景とする現象である。四月革命により李承晩政権が崩壊した後、革新勢力と保守勢力間の深刻な対立が民主的な政治運営を困難にし、社会的不安定を招いた。さらに、都市と農村、労働者と経営層間の経済格差が拡大し、社会的緊張を助長した。この分断は 1961 年の 5・16 軍事クーデターの一因ともなり、その後の権威主義的体制下でも解消されず、現在まで韓国社会の重要な課題として位置づけられている。

観光客は、4・19 義挙を韓国の民主化運動の出発点として興味を持っています。彼らは、韓国社会の歴史的背景について深く知ろうとする姿勢を見せています。」と答えた。

6. 結論と示唆

4・19 義挙は、韓国の民主主義運動の象徴であると同時に、流血の惨事を伴う歴史的な悲劇として記憶されている。そのため、この義挙の歴史的記憶を観光資源として活用することには、単なる経済的価値を超えた重要な意義がある。義挙に関連する記念館や記念碑は、単なる観光地ではなく、訪問者がその歴史を「追体験」し、民主主義の価値や市民の力を実感する場として機能している。

また、観光を通じて義挙の精神が次世代に引き継がれることで、歴史的記憶が未来の社会形成に活かされる可能性がある。歴史的出来事の記憶を保持し、それを観光という形で社会に共有することは、単なる過去の回顧にとどまらず、現代社会における民主主義の意義を再確認し、未来への教訓とする点で極めて意義深い。特に、教育的側面を強化することで、訪問者が受動的に歴史を消費するのではなく、能動的に学び、考える場を提供することが可能となる。

一方で、観光資源化にはさまざまな課題が伴う。最も顕著な課題として、歴史の商業化に関する問題が挙げられる。観光地化が進むことで、義挙の持つ本来の歴史的意義が薄れ、単なる収益目的の観光施設に変質する危険性がある。そのため、記念館や記念碑の管理運営においては、経済的利益を優先するのではなく、教育的・社会的目的を最優先に据えることが求められる。具体的には、訪問者が義挙の犠牲者の物語を深く学び、記念碑に敬意を表すような体験を設計することが必要である。そうすることで、歴史的出来事が単なる観光名所ではなく、現在と未来をつなぐ社会的メッセージを持つものとして機能するようになる。

また、ダークツーリズムは、悲劇や死をテーマにした観光として批判的に捉えられることもあるが、和解学の視点から見ると、過去の傷を癒し、未来志向の対話を促進する重要な手段となり得る。義挙に関連する記念館や記念碑は、訪問者が過去の悲劇を共有し、その教訓を学ぶ場として機能しており、歴史的記憶の継承と和解のプロセスを促進する役割を果たしている。

このように、ダークツーリズムを適切に活用することで、訪問者は単なる歴史の消費者ではなく、過去を理解し、現在の社会に対して行動する主体としての意識を高めることが可能となる。さらに、ダークツーリズムは国内外の訪問者に共通の記憶を共有する場を提供することで、国境を超えた和解のプロセスを促進する可能性もある。4・19 義挙を記憶することは、韓国だけでなく、世界の他の民主化運動や社会的対立の解決に向けた教訓を提供する点で、国際的な意義を持つと考えられる。

4・19 義挙の記憶を観光資源として活用する取り組みは、一定の成果を上げているものの、今後さらに解決すべき課題も多い。まず、観光の経済的側面が強調されることで、義挙の歴史的意義が薄れる危険性があるため、記念館や記念碑の管理運営には教育的目的を最優先に据える必要がある。そのためには、学術機関や市民団体との協力を強化し、歴史教育の観点からの展示や解説を充実させることが求められる。

次に、訪問者の層を広げる工夫が求められる。特に外国人観光客へのアプローチを強化し、韓国の民主主義運動が持つ普遍的な意義を国際的に発信する取り組みが必要である。そのためには、多言語対応のガイドやパンフレットの充実、海外の学術機関や歴史団体との連携を強化することが有効である。また、現地での体験を深めるための新しい技術の活用、たとえばデジタルガイドや仮想現実（VR）を使った展示の開発も期待される。これにより、訪問者がより没入感を持って義挙の歴史を学ぶことができるようになる。

さらに、和解学の視点からは、過去の悲劇が現在の社会にどのような影響を与えているのかを継続的に研究する必要がある。特に、義挙の記憶が韓国社会の分断や対立をどのように克服する役割を果たしているのかを実証的に検証することが求められる。こうした研究を通じて、歴史的記憶の活用方法についてのより具体的な提言を行うことが可能となる。

総じて、4・19 義挙の記憶を観光資源として活用することは、歴史の継承、和解の促進、国際的な教訓の共有といった多様な意義を持つ。しかし、その実現のためには、経済的側面と教育的側面のバランスを適切に取ること、訪問者の多様性を確保すること、最新技術を活用して歴史的体験を向上させること、そして和解学の視点から継続的に研究を行うことが不可欠である。今後、これらの課題に取り組むことで、4・19 義挙の記憶は単なる過去の出来事にとどまらず、未来の社会形成に寄与する貴重な資源としての役割を果たしていくことが期待される。

【引用・参考文献】

- 井出明（2021）『悲劇の世界遺産 ダークツーリズムからみた世界』文藝春秋
- 浅野豊美(編集)（2021）『和解学の試み——記憶・感情・価値（和解学叢書 1=原理・方法）』明石書店
- 木村幹（2008）『韓国現代史』中央公論新社
- 小此木政夫（1996）『韓国政治の研究』東京大学出版会
- 高崎宗司（2000）『韓国現代史』岩波新書
- カン・ジュンマン（2006）『韓国現代史散歩 1960 年代編 1』人物と思想社【韓国】
- キム・ヨンミョン（1990）『韓国民主主義の歴史と論理』ハンギル社【韓国】
- ハン・ホング（2002）『大韓民国史 1』ハンギョレ出版【韓国】
- 四月革命資料集（1984）『四・一九の民衆史』学民社【韓国】
- ハン・ワンサン（編集）（1990）『4・19 革命論 I』一月書刻【韓国】
- 国家報勲処パンフレット（2021）『民主主義の聖地 国立 4・19 民主墓地』国家報勲処
- Cumings, Bruce (1997) 『Korea's Place in the Sun: A Modern History』 W.W. Norton & Company
- Lee, Namhee (2007) 『The Making of Minjung: Democracy and the Politics of Representation in South Korea』 Cornell University Press.